

メイドさんと
ご主人様
140文字



登場人物

・ご主人様

.....28歳。いわゆるイケメン。職業は教師。私立皇南学院の中等部と高等部で美術の教師を務める。

良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（A子）を送りつけられる。

好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かA子相手にツッコミが激しい。

A子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「この女は敵」と認識している様子。

でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。

ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。

ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするA子に困惑する事もしばしば。

それでも最近、ちょっと気になる様子で.....。

・A子

.....本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。

黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば24歳。

才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。

家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。

体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「この男は敵」と認識している様子。

しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。それ以外でも割と最近では意見があっている様子。本質は実は似たもの同士。

コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。

その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。

またムツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。

・ B子

.....見かけは18歳。しかしその正体は400年も生きている猫又。

黒髪のロングヘアで、くるっとした瞳がチャーミング。巨乳で、ソレが原因でA子から敵視されている。

A子のサポートと称してご主人様の家にやってくる。.....が、どうやら主人であるA子の祖父から何やら言い渡されている様子。

猫らしく気まぐれな性格で能天気。メイドとは名ばかりで家事は苦手、不断は猫の姿でゴロゴロしている。

A子以上にスケベな性格で、初対面の日にご主人様を押し倒し、色仕掛けで言いなりにしようとするが、

逆にご主人様の霊格に負けてメロメロになってしまう。以後、隙あらばご主人様を口説こうとする困ったちゃん。

・ C子（たつこ）

.....秋葉原に居を構える八百万の神の一人「金屋子神（かなやご）」が、廃棄された電気こたつから作り出した付喪神（つくもがみ）。

一見可愛い男の子に見えるが実は女の子。（原因 赤外線灯のタマ切れ）

無駄飯ぐらいのB子に対し、働き者でA子の良きアシスタント。

舌足らずな口調で話し、屈託のない穏やかな性格は他人からも好かれる。しかし純情そうに見えて実はムツツリ傾向。

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「皆の衆、あけましておめでとうございますっ！……って何、二人ともその顔」

B子が元気に新年の挨拶をするが、ご主人様とA子はそろって険しい顔をする。

「……B子、まだ除夜の鐘鳴り終わってないんだが」

「最後の鐘が鳴って新年なのに。もしかして364日遅い挨拶？どんだけー」

「ぐぬぬ……」

「ならばっ！ 来年もよろしくお願いたしますっ！……って何よ、二人ともその顔」

B子は気を取り直してまた挨拶をするが、またもや二人はそろって険しい顔をする。

「いや、さあ、今除夜の鐘鳴り終わったんだが」

「来年って、もしかして2012年？ フライングってレベルじゃねーし」

「オアーッ！」

「ご主人様、準備が出来ましたが」

「おう、みんな準備出来たか」

「準備ってどうか……」

A子たちメイド3人組は、困惑した顔でお互いを見た。

「どうした？」

「ご主人様が実家に年始の挨拶に行くのでついて行くとは言いましたが……」

「何か問題でも？」

「何故登山装備で行かなければならないのです？」



A子たちの疑問は、3時間ほど電車で揺られた先でようやく解けた。

「ドコデスカココハ」

「都内ですよねぇ……」

「失礼だなB子、奥多摩も東京都内だが」

ご主人様はそう言って標高千メートルを超える山々を指した。

「まあ、この山の裏側はぶっちゃけ山梨県だが、一応山の中は東京だからセーフ」



「小笠原諸島も東京都に違いありませんからねえ……」

A子はそう言ってため息を吐いた。

「で、ご主人様のご実家はどこの村ですか――あ」

そこまで言ってB子はハッとする。何かを思い出したようであった。

「村っていうか神社なんだけどね」

そう言ってご主人様は山の上を指した。

「あの山の上にあるんだ」

「山頂……だと……っっ」

「斑鳩神社、でしたっけ」

B子が困ったような顔をした。

「よく知ってるな」

「そりゃあ、もう……」

「アンタ何で知ってるのよ」

「我が主……もとい、お嬢様のお爺様からご主人様の家へ来る前に色々と」

「何あのジジイ、私には何も説明せずに私を家から追い出したわけ？」

A子すっかりご立腹。

「……ん？」

ご主人様はある事に気づいて傾げた。

「A子、まさかとは思うが……」

「はい？」

「俺の名前、知ってるか」

その瞬間、A子の顔が強張った。

「……え」

ソレを見たB子が啞然となる。

「え、マジ」

思わず仰ぐご主人様。

「お嬢様、ご主人様と半年以上も一緒にいるのに名前すら知らないんですかっ！？」

「えー、別にいいじゃんー」

A子は耳の穴を穿りながら惚ける。

「“ご主”が名字で“人様”が下の名前かと思ってましたー」

「嘘だ」

「適当に言ってる……」

「でも、ボクたちもA子さんのなまえしりませんよねえ」

「「あ」」

C子の的確なツッコミに、思わず声を出してしまうご主人様とB子であった。

「だよねーっ！」

A子は嬉しそうにC子の頭を撫でまくった。

「名前なんて別にいいじゃんーっ」

「……でも気になりませんか？」

B子が意地悪そうに笑いながら言う。

すると、C子を撫でるA子の手がピタリと止まる。

「……アンタは知ってるワケ？」

「当然」

「ボクもしてます」

「え」

A子、思わずC子をガン見。

「金屋子神さまからきいています」

「なん……だと……っ？！」

「つまりこの場でご主人様の名前を知らない人はお嬢様だけ、うーふーふー」

B子は意地悪そうに笑う。

「べ、別に知らなくてもいいじゃないっ！」

「でもしっておいてそんはないですよねえ」

「うっ……」

たまらずA子はさすがのようにご主人様の方を見た。

ご主人様は思わず目を背けた。

「何故こっちを見ない我が主」

聞かれるも、困っているA子の姿が面白すぎるとは言えないご主人様は、口笛を吹いて誤魔化す。

「何その態度」

今度はB子たちの方を見た。

「先輩の特権です、あんたたち教えなさい」

「えー」

「うーん」

B子はともかく人の良いC子も空気を読んで答えようとしなない。

「オァーッ！」

結局A子のご主人様の本名を教えて貰えぬまま、ご主人様の実家があるという山の登山道口に来た。

「……何この1327メートルって数値」

「頂上までの距離だが」

「そんなの分かってンですよ！」

独りハブられたA子は少し苛ついていた。

「コレ、登るんですか！バスとか無いんですかっ！」

「残念ながら無い」

「そんな……」

その場にガックリとひざを突くA子。

「あー、でもこれ標高だから実際はそんな距離はないぞ」

「それくらい分かってますが、それでもキツイッス……」

「引きこもってゲームばかりやってるから体力無いんですよお嬢様」

「やかましい」

「ほら、チンタラしていると日が暮れて家に着かないぞ」

なだらかな登り道を歩き続ける一行。
やがて登山道は岩だらけの急勾配の道になる。

「ナニコレ……歩きづらい……」

「これくらいで音を上げるとは」

ご主人様は意地悪そうに言う。

「B子はともかくC子も平気な顔しているのに」

「C子は……はあはあ……人外だから……ぜえ」

「でもちょっとつらいです」

「いいのよ……気い効かせなくても」

「あと……どれくらいなんですか」

「50メートルくらいかな」

「えマジ」

A子の顔から疲れが吹き飛んだ。

「頑張るわよみんな！」

A子が気合いを入れる。

しかしB子もC子も気の抜けた返事しかない。

「何腑抜けてるのよあんたら」

「お嬢様、多分アレ」

困惑顔のB子が正面にある、断崖絶壁を指してみせた。

それにようやく気付いたA子の笑顔が凍り付いた。

「……あの、もしかして」

「大丈夫、装備はあるから」

ご主人様はザイルを取り出した。

「待てえいっ！ アンタの実家はモンハンの秘境かいっ！」

「えー？ 隣の田中さん家のほうがもっときついぞ、あっちは100メートル越えだし」

「知らんわ田中なんて！ 本当にここは東京かいっ！」

「つーか本当にこんな上に……」

B子は断崖絶壁を見上げながら絶句した。

「元々は修験者の修行の場だったからなあ。

子供の頃から上り下りしていたから気にもならん」

「ご主人様って草食系かと思ってましたが、結構肉食系……ポッ」

B子のご主人様を押し倒した夜を思い出して赤面する。

「あれは忘れてくれ……」

「ご主人様、私には無理です……っっ」

A子は泣き出しそうな顔で言う。

「いや、流石に初心者にはロッククライミングやらせる気はない」

「え？ まさか楽に登る方法あるんですか？」

……

「えーと」

A子は胴に巻かれたザイルを見て慥然とする。

「俺が上から引っ張り上げるからノンビリ風景でも見てるがいい」

「冗談ですよね？」

ご主人様が先に断崖絶壁の岩肌をスパイダーマンよろしく、
するするとフリークライミングで登って行き、
広めの足場に到着する度ザイルで縛ったA子を引き上げていく。

B子とC子は流石人外だけあってご主人様の後を着いて自力で登って行った。

「.....私、ご主人様への認識を改めなければなりません」

「どんな？」

「アンタも充分バケモンや」

「しかし凄い簡単に登って行きますねえ……」

「きたえてるんですか？」

C子が登りながら質問する。

「ガキの頃、この辺りに棲んでいた師匠に鍛え上げられてな。

ほら、いつなつて名前聞いているだろ」

「金屋子神さまがいったかたですね。ボクはおあいしたことはありません」

「根無し草の風来坊だからなあ、あの人」

50メートルの断崖絶壁を、ご主人様はA子をつり上げながら、
わずか1時間ほどで踏破した。

「ちょっと帰りは想像したくない……」

息も絶え絶えなA子が上り詰めた崖の上を見回すと、
そこには広い平地に建てられた大きな神社の境内があった。

「はい、到着」

「ここが斑鳩神社の総本山……」

B子は思わず感嘆した。

「……あの」

C子がある事に気づく。

「ひとがたくさんいるんですね」

「ああ、ここは毎年初詣に来る人が多いから」

「……参拝客に晴れ着姿の女性がたくさんいるんですけど」

A子は何か嫌な予感がした。

「ああ、あの人たちはこの山の裏側にあるケーブルカーで登ってくるからな。
こっちは近道なんだ」

「オアーッ！」

「ご主人様あっ！ バスも無いって言ったじゃないデスカァッ！！」

「近道にはな。

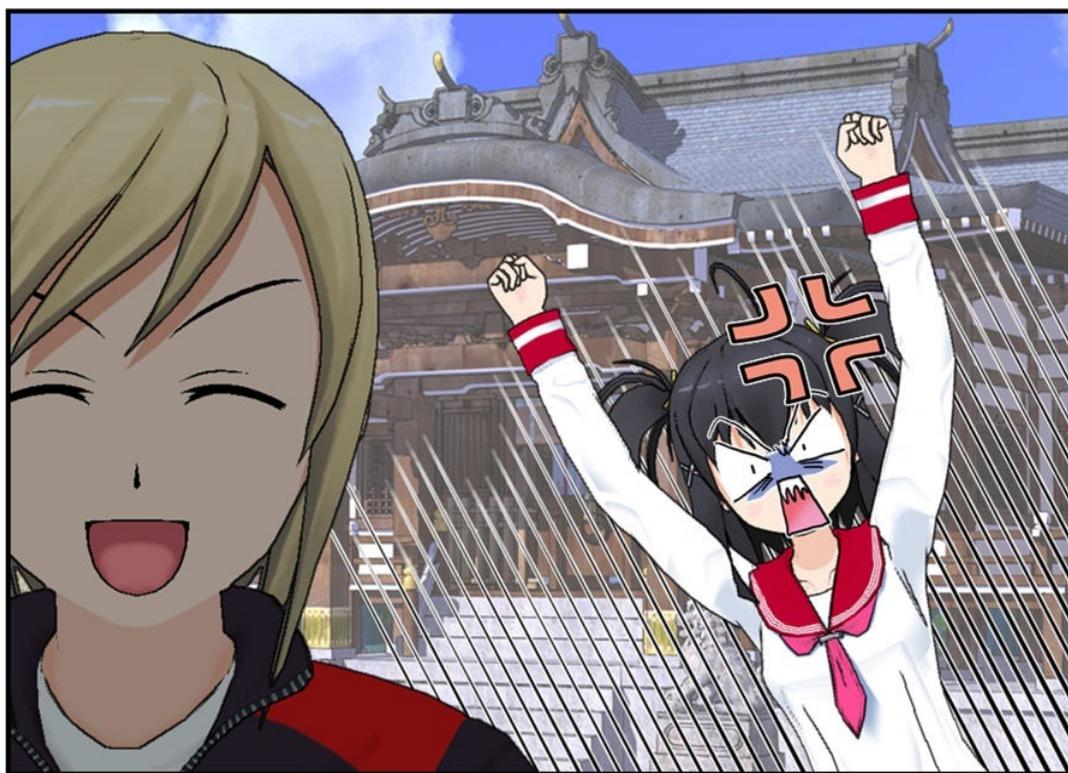
いやあ、このシーズンだろ、ケーブルカーも混んでて、
なかなか上に行けないからこっちのほうが早いんだよ」

「速さより安全選んでくださいよおっっ！」

「でもスリルがあってなかなか」

「けしきもよかったです」

「だーまーれーっ！」



「それにしても……」

B子が境内を見回す。

「女性の参拝客が多いですね」

「流行りの山ガール？ けっ、どいつもこいつもこんな山奥に物好きなりア充どもがあ……」

A子はすっかりやさぐれていた。

「もしかして、あれ」

C子が本殿がある奥の方を指した。

その手前には本殿を一回り小さくしたような社があり、その周りは参拝客で一杯になっていた。

「ありゃ能楽堂だ。正月に巫女舞が催されるからな」

「巫女？」

ピキーン、というオトマノベを頭に閃かすA子。

「どこ、どこ？」

「巫女、って言ってもなあ……」

何故かご主人様は険しい顔をする。

「あれを。よく見ると舞台上で誰か舞ってます」

B子が指した。

「行く」

すっかり元気になったA子は駆け足で人だかりに向かった。

「うわあ……」

能楽堂の前に着いたA子は、舞台の上を見て思わず感嘆の声を上げる。
その後を追い掛けてたB子とC子も、それを見て同じ反応をした。
舞台の上では、白装束に身を包んだ巫女が、参拝客たちの前で、
華麗な神事の舞を披露していた。

「うわあ……凄い美人」

B子が巫女的美貌に思わず絶句した。



第334話

舞台の上で神事の舞を演じる巫女は、その妖艶な美貌と華麗な動きで、その場にいた参拝客たちの心を完全に捉えていた。女性参拝客に至っては揃って頬を赤らめ、その舞と美貌に魅入られて身じろぎ一つしていなかった。

「……あれ、こっち見てウインクした」

A子は、巫女が自分を見ている事に気づいた。

「俺が居たから挨拶したんだよ」

A子の背後でご主人様があった。

「へ？」

「あれはここの当主だから」

「当主、って事は……」

A子が訊こうとした時、神事の舞がちょうど終了した。

そこでようやく参拝客は妖艶な支配から解かれて我に返った。

「後で紹介する。参拝客の邪魔になるから、俺たちは本殿に行くぞ」

能楽堂の横にある細道を抜け、本殿に着いたご主人様たち。

その横にある、平屋建ての住居と兼用になっている社務所に向かい、玄関へ入っていた。

「しつれいしまーす」

しーん。

「おるすですか」

「今、みんな能楽堂の方に行ってるから誰もいないよ」

背後からのその声を聞いてA子たちは驚いた。

「何今のCV若本」

驚いたA子たちが振り返る。

そこには、先ほどまで能楽堂で神事の舞を演じていた妖艶な美貌の巫女が穏やかな笑みを浮かべて立っていた。

「おかえり秋徳（しゅうとく）。連絡くれたら使いの者を麓に向かわせていたのに」

その巫女は明らかに、有名声優に良く似た渋い男性の声を発して一向に挨拶して見せた。

「ほら、正月だから忙しいと思ってな」

苦笑いするご主人様。

「また裏から登ってきたのか」

巫女は裏山のほうに一瞥をくれて呆れたふうに言う。

「あの山道はその子猫ちゃんたちにはきつかったんじゃないかい」

「いやぁ氣い使うほど……ってオイ」

ご主人様は固まっているA子たちにようやく気づいた。

「どうした」

「あの、この人、女性ですよね」

「いや、俺の兄貴だが」

ご主人様のその言葉にA子たちの顔から表情が消える。
理解不能な事態に直面すると、人は思考も感情も停止してしまうようである。

「まあ……、このツラだからなあ」

「はっはっはっ、無理もない」

CV若本な巫女はにこやかに笑って見せた。

「失礼、碑ノ輪春慶（しゅんけい）と申します。そこの秋徳の兄で
す」

それを聞いた途端、A子たちに衝撃が奔った。

「「「あにいいいっっ!?!」」」

「まあ当然の反応というか見飽きた反応というか」

苦笑いするご主人様。兄を紹介する時に散々繰り返されてきた光景なのであろう。

「この斑鳩神社の祭主を勤めております。ご自分の家だと思ってゆっくりしていってください」



春慶がにこりと笑うと、動揺していたA子たちもようやく落ち着きを取り戻す。

だが、B子だけは別の意味で落ち着いたようであった。

それは落ち着いたと言うより、別の感情に動揺が押し流されたような、そんな不安げな顔であった。

「……て事は、ま、さか、」

「春慶様、早いですお待ちくださいませ～」

春慶の後ろからその声は聞こえてきた。

よく見ると能楽堂の方から、金髪の女性が駆け寄ってきた。

「あらあら秋徳さん、あけましておめでとうございます、お帰りなさいませ」

「あ、怒依（ぬえ）さん、あけましておめでとうございます。本年も宜しく申し上げます」

ご主人様は挨拶した。

「こちらこそ～裏の温泉も良い塩梅だからゆっくりしてらしてねえ～」

怒依はのんびりとした口調で答えた。

「ご主人様、どちらさまで？」

隣のA子が訊いた。

「ああ、彼女は……」

「ああ、失礼しました～ウチは怒依と申します、春慶様の妻――ひでぶっ」

そう言った瞬間、突然春慶は怒依を殴り飛ばした。

第344話

A子たちが啞然とする中、先ほどまで多くの参拝客を魅了する美しい舞を舞っていた春慶に、

表情一つ変えずに殴り飛ばされた怒依は、ボロ雑巾のように転がっていった。

「……ああ、間違いない、あの〈鬼の春慶〉」

B子は身震いした。

「その二つ名よく知ってるな」

「……ええ、有名ですから、“こちら”側では」

「てコトは、だ」

ご主人様は痙攣している怒依をチラ見し、

「彼女の事も？」

「.....長生きしているほうですが、“現物”と遭遇したのは初めてです」

B子は青ざめた顔で小声で答えた。

「でも、それ以上に...」

B子は春慶を見た。

「怖いか？」

ご主人様に訊かれて、B子は無言で頷く。

「.....〈鬼の春慶〉を恐れぬ妖怪など居りません」

「どうしたの？」

A子がC子の様子に気づいた。

「ご主人様、C子が気絶してる」

「そりゃあ気絶するわ……だってあの」

「イヤですわ春慶様、冗談ですわ、ホホホ」

「うわっ！」

B子は突然現れた無傷の怒依に驚いた。

「うそ……傷一つ無い」

啞然とするA子の隣でB子が溜息を吐く。

「流石妖怪“ぬえ”」

「B子、今アンタ妖怪とか……」

「彼女は妖怪“ぬえ”の化身だ」

「え」

ご主人様の言葉にA子は吃驚する。

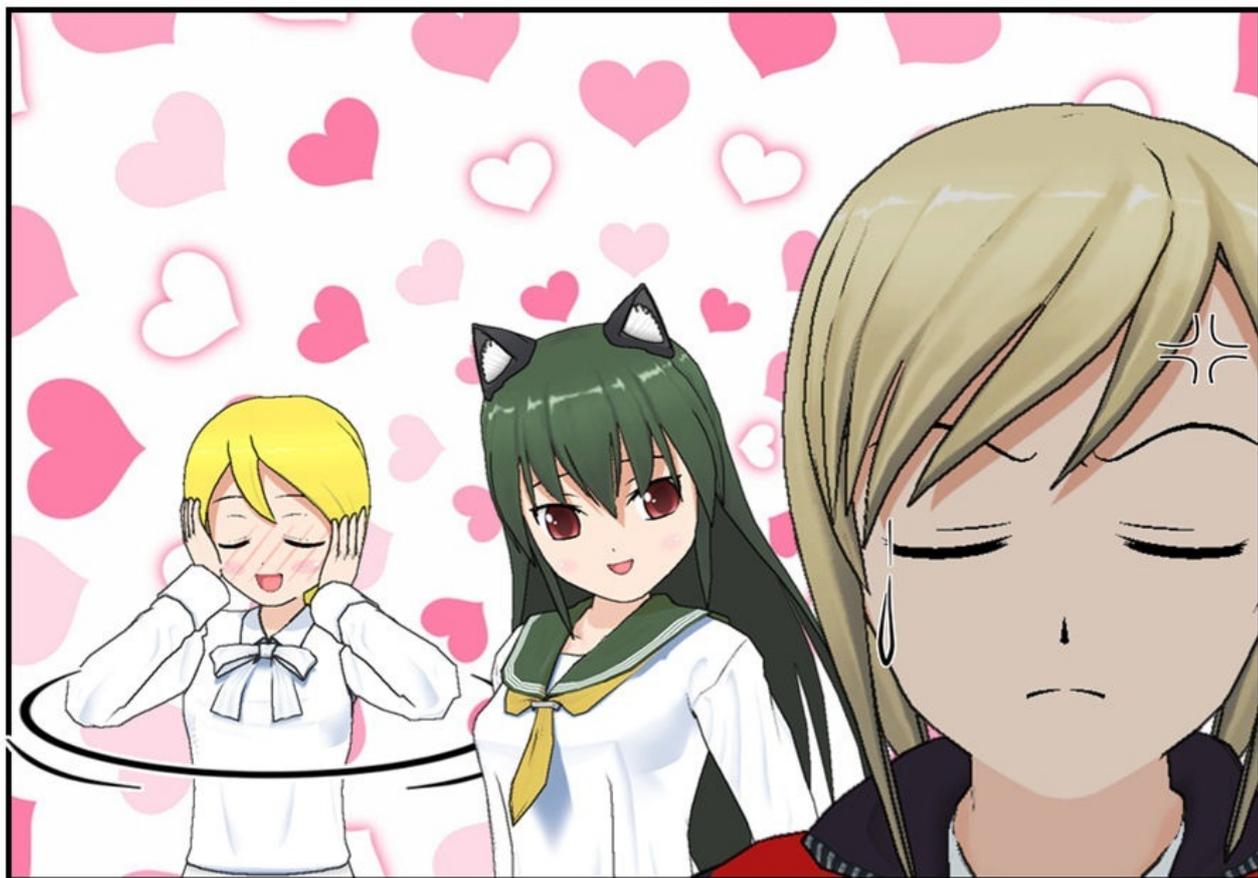
「10年前、京都で彼女を封印していた宝玉をうっかり壊したバカが居てな。

暴れ回ったので兄貴が法力で調伏した」

「法力というより精力でしたけど～」

そう言ってぬえは頬を赤らめた。

「あんな凄いテク、初めて～」



「……」

それを聞いて呆れ顔になったB子はやがてご主人様を見た。

「凄いのは血なんですね」

「うるさい黙れ、そもそもあれはお前が悪い」

「つか」

A子をご主人様の方を向いた。

「？」

「やっと名前を知りましたよ！碑ノ輪秋徳！それがご主人様の名前なんですね！」

「まだ根に持っていたのか」

「それは兎も角」

春慶が咳払いする。

「積もる話は後にしようじゃないか。俺はまだ仕事があるから怒依、案内は任せる」

「はい～」

怒依は敬礼して一行を案内した。

「……ご主人様」

「何、A子」

「お兄様、凄いメイクですね」

「いや、あれでスッピンだが」

「……ノーメイクであんな美女顔なんですか」

「あまり触れるなよ。あの女顔のせいで凶暴な性格に育ってな。

身内以外には遠慮無いから」

「根は良い方なんですよ～」

怒依はへらへら笑いながら言う。

「口より拳が先に出る時点でどうかと……」

「不断、向こうに回している連中がハンパ無いですからねえ～」

「連中？」

「妖怪退治の仕事なんです～」

「妖か……」

思わず絶句するA子。

「俺はそっちの才が無いから良くは知らないけど、実家の裏家業らしい」

「祭主兼弁護士兼退魔師……って、どこのラノベの主演ですかソレ」

「言うなよ。本業は弁護士だが、まあそっちも魑魅魍魎の世界だからなあ」

「裏でも表でも化け物退治ですか。大変そうと言うか……」

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

ご主人様たちは客間に通され、やっと重い荷物を下ろす事が出来た。

「ふにゃあ、やっと楽になったあ」

「ご主人様、次はあんな道もうゴメンですから」

「怒依さん、親父たちの姿が見えないけど」

「奥様と一緒に年始の挨拶に出かけておられます。帰りは明後日になるとか」

「あー、行き違いになるのか」

「秋徳さん、ゆっくりされないんですか？」

「仕事で明日の午後には帰らなきゃならないんでね」

「ソレは残念……噂のメイドさんたちの話聞きたかったです」

「いや、本人たちが居るんだから聞けばいいじゃん」

「そういえばそうですね～」

怒依は舌を出して笑った。大妖怪とは思えぬノンビリ屋である。

「それにしても……」

怒依はA子たちを見てクスッ、と笑う。

「秋徳さん、昔から面白い娘に好かれるとは思ってましたが、ここまでは～」

「あ、いや」

「？ どういう事？」

きょとんとなるA子。

「いや、だって～」

「ちょっと」

「あらあら」

ご主人様は怒依をA子たちから引き離した。

「その件で実は……」

「？」

「怒依さんや兄貴なら一発でお見通しだろうけど、
ちょっとアレだけどパンピーも居るんで」

「パンピー？」

怒依はA子を見た。

「ひょっとしてあの子？」

「ちょっと事情があってアレに胸のでかいのが猫又なのを隠しているんで……」

「いや、そうじゃなくて～」

怒依はA子の方へしゃくってみせる。

「あの娘が一番面白いのに～」

「イヤ、確かに性格的に面白いけど」

「イヤ、だから～あの娘が一番変わってる～」

「え」

ご主人様は思わずA子の方を見た。

「もしかして気づいていないの～？」

「気づく、って」

「あの娘、人じゃないと思うわぁ～」

それを聞いた瞬間ご主人様の表情が凍り付いた。

それはかつて金屋子神からも言われた言葉であった。

「正確には人で間違いないんだらうけど～魂が人のカタチをなしてなのよ～」

「どういう事ですか……」

「んー」

怒依は困ったような顔をする。

「あやかしの類ではないとは思うけど、あやふやすぎてちょっとねえ～。

春慶様なら分かるんじゃないかなあ～」

「兄貴なら……」

「まあその話は、後で一緒に温泉に入ってゆっくり訊かれると良いのではないかと～」

「あ、ああ」

「温泉は今掃除中なので先にご飯でもいかが～？」

「ああ、ご馳走になります」

ご主人様はもう一度A子を横目を見た。

A子は内緒話をしているご主人様たちを怪訝そうに見つめていた。

「そう言えばご主人様」

「食うか喋るかどっちかにしないかA子」

「もぐもぐ。崖登っていた時に思い出したんですが、以前、私が登山の話をした時（第94話）に、山登りは小学生以来とおっしゃいませんでした？」

するとご主人様は不思議そうな顔をする。

「.....自分ん家の敷地で山登りって言う？」

「そうきたか」

「ていうか今敷地って言いましたよね」

「ああ。この辺りの山、うちの所有物だし」

ぶっっ！ A子思わず飯を吹き出す。

「ここの辺りって国立公園じゃないんですかっ?!」

「ああ、向かいの佐藤さんちと田中さんちの辺りはそうだけど」

「向かいって……」

「向かいに見える山と、その隣にある山」

「イヤその説明ではさっぱりわかりません」

「ウチが説明します～」

そう言って怒依が地図を持ってきて広げた。

「えーと、この山がここで、ここを中心に、こう、こうと」

怒依は地図の上を指先でなぞり続けた。

「……何？」

「わかりません～？」

「いえ、ご主人様の説明よりもの凄く分かり易いんですけど、

分からないのはなんで個人で

こんな広大な敷地持ってるんですかっ！？」

「私の見立てに間違いなければ軽く新宿区が入りますよこの範囲……っ」

B子が呆れるように言った。

「でも住んでいるのは数人で、山ばかりだから宝の持ち腐れも同然ですけどねえ～」

「山奥だからなあ」

「あー、でも最近は地デジが入るようになったんですよお～

スカイツリーが出来るともっと観られるかも～」

「スカイツリー？」

「本堂の裏を登って行くと開けるんですが、そこから東の方に見えるんですよ〜」

「うちのへやだとはしっこしかみえませんよねえ、うらやましい」

「アレはほとんど見えないに等しいと思うが」

「東の方角に一本の線が見えた時は吃驚しました〜、

ウチ、まだ近くで見た事ないんですよ〜」

「だったら一度うちに泊まりに来ると良いよ。

どーせ兄貴の仕事で都心に来るんでしょ」

「ありがとうございます～。

でも春慶様、そう言うのにはあまり興味ないみたいですし～」

「前に私たち観に行った事ありますよ。

作りかけなんて今のうちしか観られないし一度くらいは」

「そうですよね～考えておきます～」

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

地デジ化はお早めに。

しつこい人は嫌いです
作 ARM



メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「それにしてもご主人様の実家ってえらい資産家だったんですねえ」

「そーでもないよ子猫ちゃん」

A子は背後からいきなり聞こえてきた若本声に吃驚した。

「あ、兄貴、お疲れ」

「まあゆっくりしていけやあ」

「.....あんな絶世の美女顔で声が若本って、新しいジャンルすぎる」

A子はまだ動揺していた。

「ああ、兄貴、ボジョレ・ヌーボーどうもな」

「おう」

「熱々で美味しいのが出来たけどなっ！（第2
31話）」

「熱々...だとお？」

すると春慶は怒依を睨んだ。

「お前、何送った？」

「あ、いや、ボジョレ・麻婆を……」

「ぶあかやろおうっ！俺が送れと言ったのはぬ
ーぼー一年分だったろが！」

「チョットマテ」

「さ、探したんですが売ってなくて……」

「それでも探すのがお前の仕事だろうがあ！」

「……初めから酒の方を送る気無かったのかオマエラ」

「……結構お茶目な人なんですね」

B子が呆れた風に言った。

「ていうか今時売ってるんですか、お菓子のぬーぼーって」※

「俺というより怒依さんへの嫌がらせのような気がする」

※ぬーぼーは1996年に生産終了

「ソレはともかく……」

春慶はA子たちをぐるりと観た。

そしてご主人様の方を観て、

「お前、つくづく面白い連中に好かれるなあ」

「いや、雇ってるだけですから……あ」

ご主人様はふと、ある事を思い出した。

「そういやうちにメイド送りつけてきたのはうちの親父たちだよな。

兄貴、何か話を聞ってる？」

「否、何も」

「そっかぁ……ん？」

ご主人様はそこで、春慶がA子の方をじっと見ている事に気づいた。

「どうした？」

すると春慶はご主人様の方を向き、

「飯食ったら風呂に來い」

そう言ってさっさと客間を後にした。

「？ どうしたんですか？」

「あ、いや……」

A子を注視していた春慶の姿に、ご主人様に不安が過ぎっていた。

「ところでこのにく、おいしいですねえ」

「あまり食べた事のない味なのよねえ」

B子とC子が大皿に盛られた唐揚げを美味しそうに頬張りながら訊く。

「あー、そのお肉はねえ〜」

どん。

「昨日裏で獲れた熊の肉なのよお〜」

そう言って怒依は、テーブルの上に置かれた、少し焦げたクマの頭をポンポン、と叩いた。

それを見て思わず凍り付くA子。

「なななな」

「……おめー、昔、俺に猿の脳みそ食わせた事ある（第1話）のに何ビビってる」

ご主人様は啞然とするA子の横で熊の唐揚げを頬張った。

「あー、くまさんですかー」

「なーるほど」

B子もC子も安心した風に唐揚げを食べる。

「何このウチの連中のワイルドさ」

「ていうか！ どうやって熊を」

「素手で」

そう言って怒依は右手をかざして放電して見せた。

「捕まえたのは春慶様なんですけどねえ。私もちょっとお手伝い」

「.....流石伝説の雷獣。熊が焦げているのはそれが原因なのか」

「時々ここに紛れてくるのよねえ～。

最近是人里にも降りてくるようになって本当、困っちゃうのよねえ～」

「暴れるの？」

「春慶様が粉碎しちゃうから掃除がねえ」

「え」

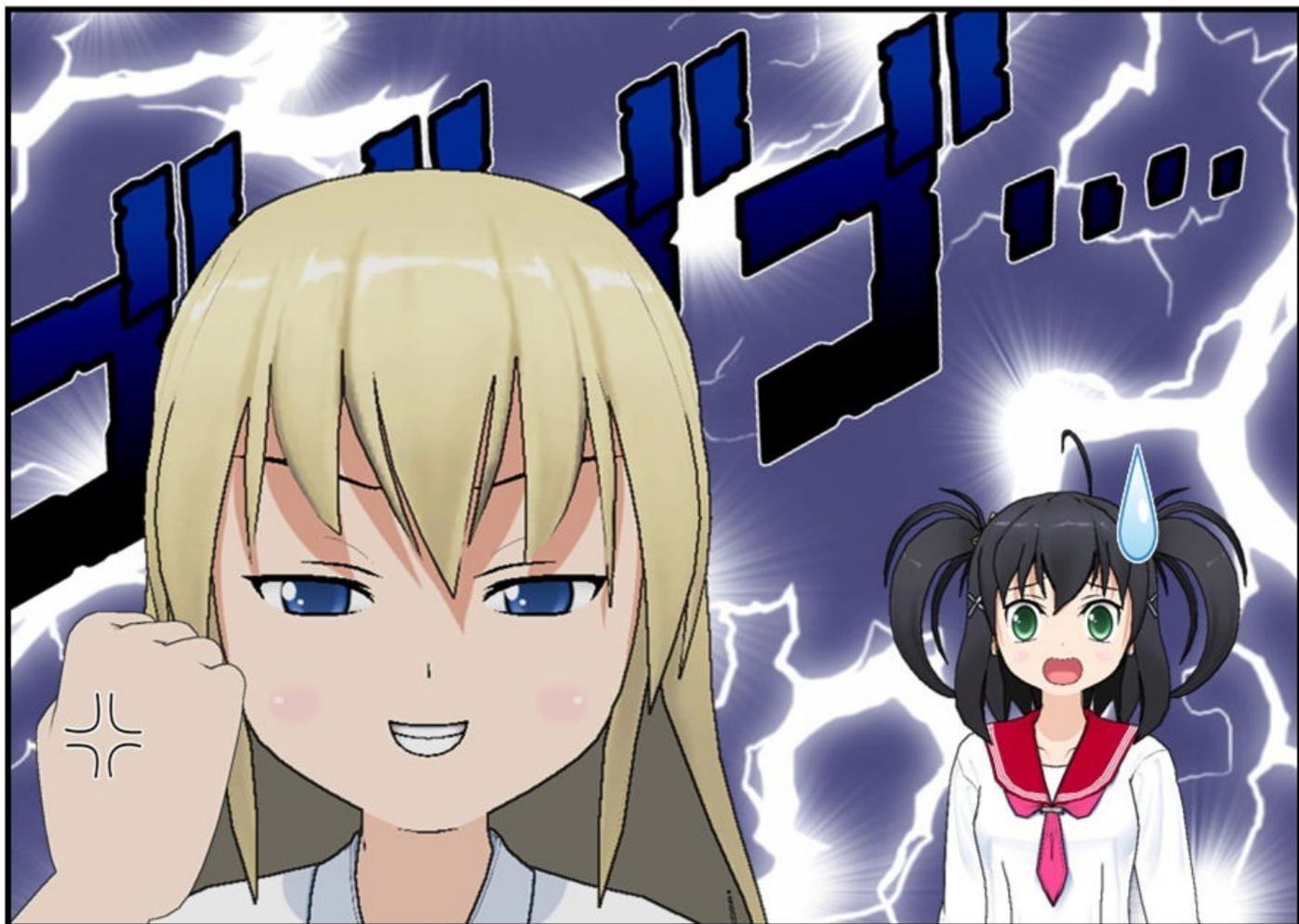
「あー、兄貴なら仕方ないかあ、色々もてあましているからなあ」

「そんな普通に言わないでください！ あの女みたいな人が！ 素手で!?」

「ガキの頃から化け物みたいな体力の主だったからなあ」

「おかげでアッチの方もお相手するのが大変で～きゃあ～」

怒依は頬を赤らめて照れまくった。



「……とりあえずその生臭いモノ何とかしてくれませんか？」

A子は熊の頭を指して呆れるように言う。

「あー、ゴメンねえ、今片付けるから～」

ごきん。

ぼきん。

ぺき。

ぼき。

肉と骨が碎ける音がしばらくの間客間に鳴り響いた。

「ふう。久しぶりのご馳走だったから嬉しくて、つい……って、あれ～A子さん何青い顔して～？」

「そろそろ風呂へ行くかな」

ご主人様は立ち上がった。

「着替えは後で持ってきますから、どうぞごゆっくり～」

「ども。みんな、ゆっくり食ってて良いぞー」

「「はい」」

「……」

「どうしたA子、顔色悪いぞ？」

「……いえ、どうぞごゆっくり……怒依さん、胃腸薬無い？」

「熊の胃ならあるわよ～」

「もう勘弁して……」

ご主人様は社務所の裏手にある、子供の頃から使っていた露天風呂に入った。
そこには既にご主人様の兄、春慶が浸かりながら一杯引っかけていた。

「おー、来たな、先にやってた」

「我が兄ながら、湯船で顔だけ出されているとドキッとすわ」

「聞き飽きたわそのセリフ」

二人は同時に吹き出した。

ご主人様も服を脱いで露天風呂に入る。

「お仕事お疲れさん」

「これも当主の勤めだからな」

「普通巫女舞なんてやらんだろ……」

「アレはアレで楽しいぞ。お前も演らないか？」

「遠慮しとく。つーか無理」

そう言ってご主人様は春慶の顔をまじまじと見る。

「少し痩せた？」

「去年は仕事が忙しくてな」

「どっちの？」

「どっちもだ」

ご主人様はため息を吐いた。

「全く、そんなハードな生活やってるクセにタフというか」

「鍛え方が違う、鍛え方が」

そう言って春慶は胸を張る。女顔とは裏腹に中々の筋肉漢である。

「なんなら俺が指導してやろうか」

「いや、無理。俺にはカタギの生活で一杯一杯です」

「緩いのう」

春慶は呆れたように言う。

「そんな甘い事言っていたら48時間戦えんぞ」

「常人なら24時間ぶっ通しでも厳しいわい。この完璧超人め……」

ご主人様はふと、視線を下げた。

「……あー、いや、完璧じゃなかったな」

「何を見てる何を」

「いや、その、被ってるモノを」

春慶はご主人様を小突いた。

「いたーい」

「日本人男性の半数近くが抱えているナイーブな問題に触れるでないっ」

そう言って春慶は杯を煽った。

「……でも流石に被り過ぎと違います？ 仮性というよりこれは真せ」

ばかり。

「いたーい」

「お前は俺のナニを心配しに帰郷したのかっ」

「いえ」

「なら俺のハイパー兵器の話はここまでだっ」

「お前、ツレの事が気になってるんだろ？」

「うっ」

ご主人様は押し黙った。

「お前、昔から誤魔化すのヘタだからなあ。

そのクセ、変なのに好かれるから、無用なトラブルに巻き込まれるんだよ。

えーと、なんだっけ、あの人形女とか……」

「あー、いいからその話は」

「で、どれだい？猫又か、こたつか？」

「凄いな、良くそこまでわかるな」

「こちとら、“あちら側”の連中相手に切った張ったやってんだ、
それくらい見抜けなくてどうするか」

春慶は胸を張ってみせる。

「あー、でもその二人じゃない」

「？」

「へ？」

春慶がきょとんとするのでご主人様も目を丸めた。

「ナニ、じゃあ、A子ってあやかしじゃないの？」

「もしかしてあの小さいのか？ 何言ってやがる、ありゃあ、ただの人間だ」
「え」

思わず見張るご主人様。

「だって、怒依さんが……」

「そりゃあ、アレも初めて見たんだろ」

「何を」

「そら、……」

そこまで言うと春慶は何かを思い出したらしく口をつぐんだ。

「なんだよそれ」

「大丈夫だ問題ない」

「……何、隠してる？」

ご主人様は春慶を睨むが、春慶は惚けてみせる。

「いーんだ、細けえことは」

「いーや、気になる。……親父もそうだ、なんでアレを雇ったのか、
前々から不思議に思っていたんだ。

いったい何を隠しているんだ？」

すると春慶はしばらく唸り、

「……どうしても知りたいか？」

「ああ」

春慶はため息を吐いた。

「わかったよ」

「いったいA子は何者なんだ？」

「もう一度言う。アレは間違いなく人間だ。

但し、ちょっとばかし変な呪いが掛かってる」

ご主人様は呪いという言葉に思わず顰めた。

「……まさか発育不良の」

「んー、それは結果みたいなもんだ。なんつーか、魂がちょっと足りてない」

「魂が足りていない？」

ご主人様は戸惑った。

「正確に言えば削られているって事だな。

ただ、どういう事情でそうなったのかは、俺も親父殿から聞かされていない」

「親父が？」

「アレは親父殿の知り合いの娘なのは知ってるよな」

「それとなく……」

「多分、親父殿も詳細は聞いていないだろうよ」

「聞かないで預かったって言うのか？」

「聞かなくても解るところがあったんだろ。俺たちの親父殿だぞ」

「あー」

ご主人様は何となく納得した。

「でも何で俺の所に」

「聞いてないのか」

「ああ」

「ありゃあ、お前の嫁にする気だ」

「ブーッ！！」

思わず吹き出すご主人様。勢い余って湯がしぶいた。

「するっていうか様子見、お試し期間だ。その呪いってのもあるから」

「いやマテ！　お試しとか何言ってんの！？」

「お前がいつまでも身を固めないからじゃねーの？」

「それ言ったら兄貴だって！」

「あー、俺は忙しいから」

「忙しいとかじゃねえ！　長男差し置いて俺が嫁って！　何言ってんのアンタたち！」

「嫌なのか？」

「嫌も何も俺は――」

刹那、ご主人様の脳裏に一人の女性の笑顔が過ぎった。

「……満更でもないクセに」

春慶はニヤニヤ笑う。

「いや、その……」

「まあそれだけじゃないだろう。

嫁云々はあるいはその呪いに関わる話で、

親父殿も本気で嫁にとらせるとは考えてないかもな」

「とにかく、だ」

春慶は湯船から立ち上がった。

「直ぐにでも決めろとは言われていないのだろ？

親父殿から正式な話があるまではこの話、気にするな」

「……」

黙り込むご主人様は、困惑する顔を湯の面に揺らしていた。

「……それがお前の良い所でもあり、悪い所だな。

まあちょっとは真面目に考えてみるといい」

「まあゆっくり浸かりながら考えてろ」

そう言って春慶は露天風呂から去っていった。

しばらくしてご主人様はようやく頭を上げて、はあ、とため息を吐いた。

「……嫁、ねえ」

湯船の岩に背もたれしてそうつぶやくと、

ご主人様は前面に広がる藍色と茜色の境目をぼんやりと見つめていた。

「……なんだかなあ」

ご主人様は瞑った。

思えば、色々と思い当たる節はあった。

しかしそこへの結論には何故か至っていなかった。

もしかすると敢えて意識していなかったのかもしれない。

もう一度、あの女性の笑顔が浮かんだ。

「……え、誰かいるの？」

聞き覚えのある声に驚くご主人様。

振り返るとそこに全裸のA子が立っていた。



「どわあっ！」

驚いたご主人様が思わず飛び退き、A子に背を向けた。

「何でお前いるんだっ!？」

「いや、怒依さんがそろそろ風呂空いた頃だって言ったから」

A子は全裸を隠しもせず、平然とした顔でそのまま湯船に浸かった。

「お、おい」

「このままじゃ寒いんです」

「あ、ま、まあ……」

ご主人様は背にしたまま頷いた。

「ま、まあ、湯船に入ってくれた方が見えないし」

「見たかったんですか？」

そう言うとA子は立ち上がった。

「湯に浸かってろ！」

「はい」

ちゃぽん、と音を立てて再びA子は湯船に浸かった。

その音を聞いてご主人様はほっと胸をなで下ろす。

しかし依然、A子に背を向けたままであった。

(くう、このままでは出るに出られん)

「何でこっち向かないんですか」

A子が不思議そうに訊く。

「.....おめー判ってて訊いてるだろ」

「はい」

「あー、こういう女だって事は判っててもイラッとする」

「別にこっちは見られても気にしませんよ。

巨乳好きの男相手なら、私の裸見ても劣情なんて抱かないだろうし」

「このヤロ」

ご主人様は呆れながらようやく振り返った。

確かに湯に浸かっているお陰で、A子の裸体は上手く見えなくなっていた。

A子はニヤニヤ笑いながらご主人様を見ていた。

「全く世話の焼ける人だ」

「お前が言うなお前が」

流石にご主人様も苦笑いした。

「俺、出ようか」

「湯冷めは身体に良くありません」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

そう言いつつ、ご主人様はA子と目を合わせまいと横を向いた。先ほどまで頭に巡っていた想いがそうさせた。

「しかし綺麗な場所ですねここ」

A子は変わりかけの夜空を見上げながら言った。

「もうしばらくすれば星空が広がると思う」

「同じ都内とは思えませんね」

しばらく二人は夜空を見上げていた。

眼前に広がる藍色にやがてぽつぽつと光が灯り始めると、A子は思わず感嘆の声を上げた。

「この辺りにはないが、日本アルプスなどでは森林限界を超えた所まで登るともっと綺麗に見えるそうだ」

「山登りはもう結構ですが、一度くらいは見てみたいですねそれ」



「ご主人様は子供の頃からこんな所にお住まいだったんですか？」

「生まれも育ちもここだ。大学で初めて23区内に住んだ」

「そうなんですか」

「お前さんは？」

「私？」

A子はきょとんとする。

「言いたくなければ良いが、まあどこに住んでいたのかくらいは訊きたいな」

「生まれも育ちも23区内です」

「江戸っ子？」

「残念ながら」

「意外とサッパリしている所があるからそうかな、とか思ったが」

「世田谷の田園調布です」

「珍しい、そこまで教えるか。ていうかお嬢様の定番だな。

大学は俺と同じだって言ってたが高校までは女子校だとか」

「いえ」

「共学？」

「そうじゃなくて」

「？」

「覚えていないんです」

「へ？」

「大学に入るまでの事が綺麗サッパリ」

湯気越しに見える A 子の顔が曇っていた。

「……正確に言うと大学も入ってしばらくの事が覚えていません」

「どういう事だ？」

「良くは知らないのですが、病気だそうです」

「病……」

刹那、ご主人様の脳裏に呪いの二文字が過ぎった。

「記憶喪失？」

「原因不明の病気だそうです。

高熱で脳の記憶中枢にダメージがあったらしいのですが、
熱で倒れた事すら覚えていません」

「……」

「気がついたら、金持ちのお嬢様の自分がいた。

正直、自覚ないんですよ」

ご主人様はA子と初対面の時に、母親をババァ呼ばわりして罵倒していた事を思い出した。

「お嬢様にしては粗暴な所があったから変だと思ったら……」

「家族だ、親だ、って言われても実感ないんですよ。

ただ、普通に生活するだけの知識だけは覚えていたので大学には通いました。

友達だって人もいましたが、駄目でした。

全然、思い出せません」

「友達まで…」

「気持ち悪さしか無いんですよね」

「正直、怖いと思った事もありました。だから自然と引きこもって」

ご主人様は、A子が単にヲタ趣味で引き籠もっていたワケじゃないと理解した。

「引き籠もるとやる事ないですからね。自然とゲームばかり。ご主人様もそうですか」

「いや俺は別に引き籠もってゲームしていたワケじゃねーし」

「それでも大学は何とか通って単位とって卒業しました。2年遅れましたが」
「そうか。確かにそれじゃあ俺とニアミスする確率は低かったな」

ご主人様はA子の意外な過去に興味を引いていたが、
その反面、先ほどから脳裏から離れない、“呪い”という言葉が心を惑わせていた。

「卒業したら完全に引き籠もりコースです」

「そうか……」

ご主人様は今まで自分の事を語らなかったA子の心境を巡らせつつ、その過去に同情していた。

過去を失う事がどれだけ辛いか。

親しかった人すら違和感を覚える恐怖など、簡単には理解出来るものではない。

シニカルなキャラに見えるこの女性が隠していた重さに、

ご主人様は言葉を失くしていた。

同時に、何故A子が急に自分の事を語り出したのか、不思議に思った。
成る程、自分というモノを亡くしているのだから、
自分を語りたがらないのも無理はない。

それが急に語り始めたのは何故か。

「フェアじゃないから」

「え」

「ご主人様の名前知りましたから」

ご主人様は心を見透かされた気がして驚いた。

「どーせ私が自分の事言い出したから驚いているんでしょ」

「あ、いや」

「別にこの程度の事教えたからって私のすべてを知ったワケじゃないし」

そうでもないぞ、とご主人様は答えそうになって口をつぐんだ。

A子という“存在”を奪ったのは、病気ではなく呪いではないかと、ご主人様は直感したからだ。

A子は自身の呪いを知らないでいるのであろう。
病気と言う言葉で濁しているだけなのかもしれないが、
A子の性格なら決して信じまい。
ご主人様は少し迷い夜空を仰いだ。

「……何もそこまで義理堅くても」

「いいんです。話さないといつまでも胡散臭い女だと思われたままでしょうし」

「そーかい」

「いつまでも得体の知れない女雇ってると嫌でしょ」

「それはそれで面白いけどな」

「変な人」

「お前よりはマシだ」

二人は同時に吹き出した。

「つーか」

「？」

「お前さん、いつまでメイドやる気なんだ？」

「んー

」 A子は仰いだ。

「気が済むまで」

「なんだそりゃ」

「これはこれで楽しいですし」

「ぶっちゃけ、覚えのない人生に縛られるよりはこうしているほうが気が楽です」

「そういうもんか」

「そういうもんです」

そう言うとA子はご主人様を険しい顔で見た。

「……それとも何ですか、もう雇う気ないと？」

「いや、それは……」

ご主人様は困惑した。

何故そんな事を訊いてしまったのだろうか、と。

ご主人様は沈黙した。

思案しているように見えるが、実は何も考えていなかった。

だから、自然にそれが口を次いで出た。

「……つーかA子、もし、なんだ」

「？」

A子は神妙な面持ちをするご主人様を見て戸惑った。

「あー、お前が良ければ……このまますうっと」

「ずうっと？」

「つまり、だ」

その時だった。

「おー、凄い絶景の露天風呂お！」

「ぬえさんがいったたとおりです」

裸のB子とC子が露天風呂に現れてきたのだ。

「あー、ごしゅじんさま、Aさんとこんよくだー」

「もしかしてお邪魔だったかなー？」

B子がニヤニヤ笑いながら言う。

「おおお前らなな何、裸で突然現れて、何だっ!？」

「だって露天風呂だしー」

そう言うとB子は露天風呂に飛びつきご主人様に抱きつく。

「こ、こらあっ！」

「何照れちゃってえ？ホレホレ」

B子はご主人様に生乳を押しつける。

「何やってんのアンタ！」

「当ててんのよ」

「ボクもー」

C子もご主人様に抱きついてくる。

「うわあ、やめろおっ！」

「あらあら、賑やかねえ～」

そこへ更に、怒依が現れた。当然入浴の為に全裸である。

「秋徳さんがまだいたなんて～」

そう言って怒依まで湯船に入ってきた。驚きもせずへらへら笑っているその顔にご主人様は気付いた。

「怒依さんっ、あんたわかってて入れやがったなっ！」

「モテモテですねえ～」

「ちょっとまて、おいっ、みんなやめろおっ」

「……バカばっか」

A子は放置されてすっかり拗ねていた。

こうして帰省の夜は更けていった。

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「ところでA子」

「なんででしょう」

「昔、大学まで皆勤賞って言わなかったか？」

「ええ」

「でも大学までの事覚えていないって……」

「私は覚えていませんが、親曰くちゃんと登校していたそうです」

「もしかして大学まで記憶って……」

「聞かされた記憶です」

「難儀だなあそれ」

「でも自分の事は覚えていなくても、言葉や生きるための知識だけは何となく覚えていたようで。ぶっちゃけ大して困ってません」

「難儀撤回、アバウトだお前」

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

帰省の晩。

天に満ちた月は、渡り廊下の上に音もなく進む人影を落としていた。

「……むっふっふっ」

忍び足で歩むB子は何ともだらしのない笑顔を作っていた。

「こう言う夜ばいもスリルあるわねえ。

旅は人を大胆にするというかあんなワイルドな姿見せられると女が疼くのよねえ。

待ってなさいよおご主人様」



B子のご主人様の部屋まであと数メートルに近づいた時であった。

B子は背後に気配を感じ、すうっ、と飛び退く。

「人のナリはしても動きは野良猫だな」

B子はいつの間にか寝間着の春慶に背後を取られていたことに驚いた。

「い、いったいつの間に」

「夜ばいしかけられるとは秋徳も罪な男だ。ふわあ〜」

春慶は大きくあくびをした。
眠そうなその様子は隙だらけであった。

「――そう、見た目は、ね」

B子は身構えたままであった。
小物のあやかしならこの隙を狙って襲ってしまうだろう。
だが、“音もなく現れ、相手に全く気取られずに背後を取った男” に、
隙など存在すると思う方が愚かであった。

「ほう」

春慶は警戒を解かないB子に感心した。

「400年モノは流石に誘いに簡単に乗ってこないもんだな」

そう言って春慶はもう一度あくびをした。

「詳しいのね」

「＜皇城（すめらぎ）の黒猫＞といえはこの業界でも有名だ」

春慶がその名を口にした途端、B子は凄まじい形相に変貌した。

「……そこまで知っていたか」

「知っているが、判らんよ。

何故、祟った相手の家の守護獣として仕えているか」

それを聞いた時、B子の眉が、ぴくり、と動いた。

「＜黒猫＞の話は退魔師の間でも珍しい話だから有名な方だがな。

……お前、あの嬢ちゃんをどうする気だ？」

春慶はB子を睨み付けた。

春慶に睨まれたB子は一瞬、身がすくむ。

「……噂以上じゃないかこの男」

B子は寒空だということに冷や汗をかいている自分に気付いていなかった。
背後を取られてからずうっと、B子は春慶に圧倒されたままであった。

「……底知れないとはこう言う事か」

「どうした？ 答えたくないなら力づくでもいいんだぞ、猫又？」

B子ははっとする。

春慶が一步前に進んだのと同時に、B子も反射的に飛び出していた。

殺らなければ殺られる。

野生プラス400年培った直感が身体を突き動かしていた。

黒い弾丸へと変貌したB子は春慶の頸動脈を狙っていたが、

まさか正面に巨大な右人差し指が現れるとは思ってもよらなかった。

それは春慶の圧倒的な霊格がもたらした錯覚であった。

春慶は、右人差し指ひとつで、400年生きた猫又の念とその身をはじき返してみせた。

黒猫の姿に戻ってしまったB子は、弧を描きながら廊下の上にぽとり、と落ちる。

「な……何この……男……指一本でわたしを封じてみせるなんて！」

〈鬼の春慶〉 恐るべし。

「力の差を判ったか」

ゆっくりと起き上がる黒猫に春慶は嘲笑うように言った。

「あいつのメイドで無かったら問答無用で喰う所だが、手加減はしている」

事実、黒猫はゆっくりとB子の姿に戻っていた。

その身には外傷は見あたらない。

B子はゆっくりとため息を吐いた。力の差は火を見るより明らかだった。

「なるほどな。お前さん、どうやら秋徳に本気で夜ばい仕掛けてきたのか」

「うっ」

「くっくっ」

春慶は少し顔を赤らめるB子を見て吹き出した。

「本当、あいつは昔っから変わった奴に好かれよるなあ、

手前えが作った人形とかお前さんみたいなのか」

「人形？」

「聞き流せ。つーか寒い中ご苦労だが秋徳なら部屋にはおらん」

「居ない？」

「早起きして奥の水行場で滝に打たれてる」

「え？」

B子は思わず辺りを見回す。

「え？ こんな寒い時に？」

「あいつが帰省する理由のひとつだがな。

気を練る鍛錬で一時間前から頑張ってる」

B子は総毛立った。

「パンピーの暮らししているのに、師匠との約束だからってな。

もう20年も続けてるかね」

「師匠……って」

「いづなっていう女だ。人外なのが勿体ないくらいの美人だ。知ってるのか？」

「名前だけは……」

「そうか。まあ秋徳に絡んでいればいつか会うかもな。

忠告しておく、そいつにヘタに絡むな。

お前程度の400年程度のあやかしなんざ一口で喰われる。文字通り、な」

「文字通り……」

B子は頭からぱくりと食われる自分を想像した。

「それよりも、だ」

「？」

「さっきの質問にどう答える？」

再び問われてB子は固まった。

「まさか、さっきのが答え、ってわけじゃねえだろうな」

再び春慶が一步前が出る。

しかし今度はB子は飛びかかろうとしない。

それ以上何も答えようとはしなかった。

春慶は2歩進んだ所でため息を吐いた。

「……言いたくなってツラだな」

「……殺したいなら殺せ」

「バカ言うない」

春慶は吹き出した。

「お前は秋徳のメイドだろが。だったら俺に取っちゃお前は身内も同然。

いくら鬼呼ばわりされているとはいえ、俺に身内を殺せるわけ無いだろ」

B子はその言葉に思わず目を丸めた。

「第一、〈皇城の黒猫〉の逸話を知ってる時点で、お前さんの狙いなど想像がつくわ
。

お前が本気であの嬢ちゃん護ってる事は、な」

春慶は仰いだ。

夜空には、満月が下界の苛烈さなど知らずぼんやりと浮かんでいた。

「400年……、いや、真相を知って300年か。

sonだけの間、腹に抱えてきたモンがあるんだろ。

言いたくなきゃ別に構わん。

ただ、そろそろそこまで肩肘張らなくてもいいんじゃないのか」

「しかし……」

「ひとつ、良いコトを教えてやらあ」

「良いコト？」

「俺と秋徳の母親の旧姓は、蒼祇（そうし）、といえ判るな？」

春慶のその言葉を聞いた途端、B子は呆ける。

そして崩れ落ちるようにならずくまり、嗚咽をはじめた。

「まさか……そんな……そんな事って……」

泣きじゃくるB子の顔は笑顔に満ちていた。

すべての呪縛から解き放たれたかのような、そんな穏やかな笑みであった。

春慶はそんなB子を見て、ふっ、と笑みをこぼす。

「運命って奴は本当、面白れえわな。

まるで糸みたいなモンだ、一本じゃ酷く脆いが、

それが幾重にも束ね交じり合うコトで予想もしねえ堅い糸を紡ぎ出す。

嬢ちゃんが秋徳と巡り会ったのはそういうこった。焦らず見守ってやるんだな」

「……はい」



400年生きた猫又が歓喜に嗚咽している頃。
水行を続けていたご主人様がようやく滝壺から出て来た。

「ささささ寒いいい……師匠との約束とはいえ、毎年コレはキツイわあ……ふあ、ふあ……え？」

ご主人様は思わずくしゃみをしそうになった時、岸の暗がりからゆるりと現れた人影に驚いた。

「え？ 何でA子がそこに居るんだ？」

「こんなクソ寒い夜に修行なんて、良くやりますわ」

A子は呆れながらご主人様にホカホカのタオルを差し出した。

「そりゃこっちの台詞だ。何故ここに？」

「トイレに起きたらここへ来る姿を見かけまして。

で、まだ起きていたお兄様と偶然お会いして。

修行の話を聞きまして、替えの服を用意しました」

「そりゃあ、どーも」

「とっとと上がって身体をお拭きなさいな。温泉も用意出来ています」

「準備いいな」

「そりゃあ私は貴方のメイドですから」

そう言ってA子は滝壺から出て来たご主人様にバスタオルを渡した。

「くしゅん」

くしゃみをしたのはA子のほうだった。

「そんな薄着で来るからだ」

ご主人様は脇の岩の上に置いていた自分のジャンパーをA子に差し出した。

「私よりご主人様のほうが寒いでしょうに」

「鍛え方が違うわ、ほらっ」

「は、はい……」

A子は折れてジャンパーを羽織った。

「俺はこのまま温泉入るわ。風邪引かないうちに布団に入れ。……何だ、顔赤いぞ」

「何でもありませんっ」

珍しく A 子は動揺していた。ご主人様にはその理由が分からない。

「寒いんだったらまた温泉に入るか？ 暖まるぞ」

「確かに、寒すぎますけど」

「何ならまた一緒に入るか？」

ご主人様は意地悪そうに言う。夕方からかわれたお返しのつもりだった。

「な、何言ってんですかっ！ お、お断りしますっ！」

そう怒鳴ると A 子は逃げるように立ち去った。

夕方の時とは明らかに違う反応だった。

「……今更恥ずかしくってんだ？」

ご主人様は傾げた。

——小走りで行くA子の姿はまるで、その場に耐えきれずに逃げるようであった。

(何で急に……)

A子は夕方の自分の行為が急に恥ずかしくなっていた。

今までご主人様を強く意識した事など無かったのに。

実のところ、A子はここまでご主人様のことを強く意識したのは、夕方に露天風呂で遭遇した時からであった。

ただ、その時はその感情を理解出来ず、押さえる為に自分の事を話し始めた。何かを話している事でその理解しがたい感情を誤魔化せると思ったからである。

しかし実際は逆効果であった。

自分の事を話せば話すほど、心の中の動揺が広がっていった。
その理由が判らないから、話して誤魔化すしかなかった。
話していないと自分が抑えきれない気がした。

幸い、B子たちが乱入してくれたおかげで、ようやくその泥沼から這い出る事が出来たが、
しかし泥沼はそこでは終わらなかった。

A子は床に入っても、どうしても眠れなかった。

興奮しているわけでもなく、夕方から続いていたこの理解しがたい感情を沈めるべく外に出た。

静まりかえった境内を歩き回り、やがて本道の奥にある山道の先から水の流れる音に気付き、

滝とご主人様を見つけたのである。春慶との話は方便であった。

初めは、何酔狂な事を、とっていた。

しかし滝に打たれ続けているご主人様をしばらく見ているうち、
今まで自分を悩ませていたその感情が晴れていく事に気付いた。

何故この人を見ていると落ち着くんだらう。

A子は傾げたが、結局答えは得られなかった。

代わりに、暖かいバスタオルを用意しようと考えた。

しかしご主人様にジャンパーを掛けて貰った時、またもやあの感情が蘇り、その場にいるのがとても耐えられなくなっていた。

逃げるなんてらしくない。

何度も心の中で言い聞かせながら、身体は頭に反して逃げる事を選んでいて、情けないという気持ちと、怖いという気持ちがA子を支配していた。

「――え」

A子は急に立ち止まった。

前方の、少し開けた場所に人影を見つけたのだ。

月光を背にしているその人物は何故か透き通っているように見えた。

「誰？」

A子は険しい顔をする。

僅かに見えるその貌には見覚えはない。

……見覚えなど無いはずなのに、何故かA子は知っている気がした。



(こんばんわ)

それは声ではなく、直接頭に響いた。
女の声だった。

「こ、こんばんわ」

警戒していたはずなのにその言葉は自然と口をついて出た。
我ながらマヌケだ、とA子は思った。
夜の潜みにいるそれが微笑んでいるように見えたのは気のせいだろうか。
よく見るとその儂げな貌は少女であった。

(元気?)

「元気って……」

初対面の相手にやけに気さくな相手だとA子は呆れた。

「つーかどちらさまで？」

A子は訊くが、少女は何も応えず笑みを浮かべていた。

「……もしかして幽霊？」

(だとしたらどうする?)

「何コイツ急に返答しやがった」

少女はふふっ、と笑う。

(あなた、今、幸せ?)

「幸せ、って...」

面食らうA子。

不意に、ご主人様の姿が過ぎるとA子は顔を赤らめて俯く。

(...タマシイが少し、増えたみたいね)

「え」

(感情が戻りつつあるのがその証拠。でも)

少女がそう言った途端、A子は全身に激痛を覚えて突っ伏した。

「な...なに...これ...?」

(身体が悲鳴を上げてるのよ)

「ひ……め……い？」

(器が、ね)

少女は音もなくA子の元に近寄ってくる。

(その身体には、そのタマシイは大きすぎるの。

このままではあなたの身体は壊れてしまうわ)

「な……なにを……」

(だから私が何とかしてあげるわ)

少女はA子の眼前で立ち止まった。

(――吸ってあげる。その小さな身体に合うまで)

「吸うっ!？」

A子は思わず飛び退く。激痛が走る重い身体だが、危険を察知した本能はそれを凌駕した。

(逃げてムダよ。だってあなたは今まで私が――!?)

突然少女が飛び退いた。

入れ替わるように、月光を受けた刃が地面に突き刺さった。

「何、コレ……ノミ？」

そこには大工道具のノミが起立していた。

（また貴様か）

着地した少女は、自分が現れた方角を睨み付けた。

そこには、煙草をくわえ、ジーンズと法被をラフに着こなす肉感的な女性が立っていた。

「こっちのほうに現れたか」

ジーンズの女性は呆れるように言うと紫煙を吐いた。

「その娘には手を出させない、って前にも言ったろ、皇城夏穂梨（すめらぎ かおり）」

その名を聞いた途端、A子は愕然とした。

(ちい)

少女は舌打ちして闇へ溶け込んでいった。

「逃げたか。……ん？」

ジーンズの女性はA子が愕然とした顔で見つめていることに気付いた。

「あんた、一体……」

「うー、覚えちゃいないか。まあ。お前さんがボロボロの時以来だからなあ」

ジーンズの女性は頬を掻いた。

「俺の名は――あ」

そこまで言った時、A子が激痛のあまり気絶していることに気付いた。

「無理、無いかあ」

ジーンズの女性は突き刺さったノミを拾い上げた。

「あの唐変木の所に預ければ、と思ったが、予想通り治ってきたな。

まあ、この様子じゃ今までずうっと我慢していたのかもしれないな、遅れてすまん」

ジーンズの女性は詫びると、徐に懐から一本の木槌を取り出した。
年季の入ったそれは不思議な青白い光を帯びていた。
続いて拾い上げたノミかも、うっすらと光を帯び始めているではないか。

「お疲れさん」

ジーンズの女性はくわえ煙草で不敵に笑う。

「さあ、その魂に合うよう突貫工事といきますか」

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

A子が目覚めたのは2日後の昼だった。

「あ、A子さんがおきましたー」

目覚めたA子が最初に見たのは隣にちょこんと座っていたC子の笑顔だった。だが、次第にC子が不思議そうな顔をしたので、A子はたまらず不安がった。

「どうしたの？」

「……A子さん……ですよ、ね？」

「はあ？ 私以外の何に見えるの？」

するとC子は辺りを見回す。

A子も見回すところは見覚えのない部屋であった。

否、臆気に見覚えはあった。

どうやらここはご主人様の実家の客間のようなのである。

「はい」

C子は見つけてきた手鏡をA子に渡した。

「一体何が……」

次の瞬間、A子の悲鳴が上がった。

やがてそれを聞いたご主人様たちが現れた。

「どうした、A子？」

「ななななっ、何ぞこれええ！ 誰ええ！？」

A子は思わず放り出していた手鏡を指して叫んだ。

「か、鏡にイタズラでもしたのっ？」

「し、してません～」

C子は怯えながら応えた。

「だって、鏡に！」

「あー、それはな……」

ご主人様はため息を吐いた。

「ていうか、自分の身体をその目でよく見ろ」

「か、身体っ?!」

A子は掛けていた布団を剥がし、自分の身体を見た。

そしてぽん、ぽんっ、と胸や足を触り、やがて自分の顔をつねって啞然とした。

「ど、どういう事？」

「あー、それはだなあ、……どう説明しようか」

ご主人様は困った顔をした。

「何で私の身体が伸びてるのっ！」

「成長したと言え」

A子はもう一度手鏡を手にして、自分の身体と顔を見回した。

「ナニコレ……大きくなってる」

A子は胸に両手を当てる。

絶壁だった自分の胸が少しふくらんでいる事を実感した。

胸だけではない。

小学生のような身体が目覚めたら成長していたのである。

「成長といっても中学生くらいだけだなー」

A子は無言で、膨らみを帯びた自分の胸をしばらく触り続ける。

「……あのなあ」

取り憑かれたように触っているA子の姿を見てご主人様は呆れる。

「……肉襦袢？」

「いやいやいや」

ご主人様が頭を振ると、A子は突然寝間着を脱ぎ、上半身を露わにする。

「お、おいつ」

ご主人様は慌てて目を背ける。

思春期の少女のようなその膨らみは決して作り物ではなく、肌は触れる指の感触を理解していた。

「私、胸があるッ！」

「驚かなくて良いから胸仕舞えっ！」

「だって胸ありますっ！」

混乱と興奮に支配されているA子は、ご主人様に胸を自慢げに見せて騒ぎ始めた。

「何やってんのお嬢様……」

B子は呆れ返った。

「一体何があったんですっ!？」

錯乱状態のA子をご主人様に訊いた。

ご主人様は何故か答えに窮したような顔をするが、やがてため息を吐き、

「倒れているお前さんを見つけてな。

凄い熱があったから寝かしていたらでかくなっていた」

「何そのアリエナイ！」

「とにかくオチツケ」

「うー、うー！」

ご主人様はどう教えるか迷った。

――あの晩、倒れているA子を見つけたのは事実だが、その場に居たある人物の事は告げるべきかどうか迷っていた。

「よう秋徳、元気にやってるか？」

「師匠お！」

師弟の10年振りの再会。

気絶しているA子の隣で紫煙を散らしていたのはご主人様の師匠、いづなであった。



「師匠、何でここに？」

「この近くで最近取った弟子に修行させている」

「へ、へえ……、ってソレはともかく A 子が何故倒れている？」

「仕事したからな」

「仕事？」

ご主人様は困惑する。

しかし直ぐにその意味を理解した。

「――まさか A 子に！？」

「多くは聞くな。それがこの娘の祖父との〈契約〉だからな」

「〈契約〉？」

「俺の〈契約〉と言ったらひとつしかないだろ」

そうっていつなは不敵に笑う。

ご主人様は背筋がぞっとした。

「し、しかし、それがA子とどういう……」

「このままにしているとこの娘、凍死するぞ」

「あ」

ご主人様は慌ててA子のもとに駆け寄った。

「後は任せる。2日ほど寝てるはずだ、じゃ」

そう言っつていつなは月明かりの中に消えていった。

結局、ご主人様が知り得た事は、師匠がA子の祖父と “ある契約” を結び、それをA子に施した事だけであつた。

(その “契約” が問題なんだよなあ)

ご主人様はもう一度ため息を吐いた。

(幼児体型のA子の身体を弄つたのは、師匠の仕事なのは判つたが.....)

ご主人様はまた成長したA子を見た。

（何この中途半端な成長。これでもまだ年齢と一致しないし。
一体、何の目的で師匠はA子の身体を作り替えたんだ？）

ご主人様は考えるが、どうしても理解出来ない。
もっとも弟子でありながら、師匠の仕事を今までまともに理解出来た事など無かった。
。

（.....荒ぶる神の仕事はよく分からん）

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「そう言うわけで」

A子は嬉しそうにVサインを掲げ、

「A子レベル2の誕生よ！」

「何故レベル」

ご主人様、無然とした顔で突っ込む。

「ふっふっふっ、あたしはまだまだ成長出来る事が判ったんです。

今がレベル2で更にレベル3、レベル4と段々セクシーに！」

「何かどこかで聞いたような……」

「もうコレで、誰にも貧乳とは言わせない！」

「そして今まで被っていた貧乳キャラもC子一人に！ ヒャッホー！」

「貧が微になった程度で何を……痛っ、足を蹴るな！」

「なんかお嬢様のキャラまで変わってる」

「ふんっ」

A子はB子の胸を狙うように指した。

「そのうちアンタよりでっかくなってみせるからね！」

「ハイハイ……」





メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

「ところでご主人様、私、二日も寝ていたそうですが、
葉山さんと正月に約束があったのでは？」

「しょうがないさ、置いていくわけにはいかなかったし。

大将には約束の件は後日って連絡しておいた」

「申し訳ありません……」

「……謝ってる割にノリノリだなその巫女服」

「合うサイズが無いもので」

「合う服ないんでしょ～良いからそれ着てって～」

「これ着て帰るのはかなりアレのような」

「いえ、喜んで！」

A子はまだハイテンションのままであった。

「お嬢様、流石に少しは羞恥心というモノを……」

「じゃあ何故アンタらも着てるのよ」

A子は巫女服に身を包んでいるB子とC子を指した。

「A子さんがねこんでるあいだ、じんじゃをてつだっていたんです」

「何もしないで居るってのはちょっと気が引けて……」

「本当、助かりました～、何せこんな山奥なんで、特にこの時期は人手が足りなくてねえ～」

「うむ」

A子は頷き、

「じゃあ全員巫女服で帰りましょう」

「何故」

「木を隠すには森、って言うじゃない」

「いや、この場合は違う気がする」

「ふう、久しぶりの我が家だあ」

帰宅したB子は客間にごろんと転がって大きくのびをした。

「どうしたA子」

「……いや、冗談だったんですけどね」

「おめーなあ、……おかげで車中、他の客から引かれてたぞ俺たち」

ご主人様は、本当に巫女衣装で帰ってきたメイドトリオを指してため息を吐いた。

「おー、秋徳帰っちゃったかあ」

「あー、春慶様お帰りなさい〜」

「今日の仕事はちょっと手間かかりすぎたな、入れ違いか。

ちっこい嬢ちゃん目が覚めたか」

「ちょっと大きくなっちゃいましたけど〜」

「そっかあ」

「……」

「なんだ？」

「春慶様、A子さんの件宜しいんですか？」

「何で、俺が？」

「だって、何か事情に詳しいようで……」

「知ってるからって俺が動く理由にはならん」

「はあ」

「それにこれはあいつの問題だ。

当事者があそこまで揃っていると、運命があいつらだけで解決しろと言ってるようなモノだ」

春慶は仰いだ。

「秋徳ならやれる。俺の弟だぞ？」

「あはは……」

怒依は苦笑した。

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

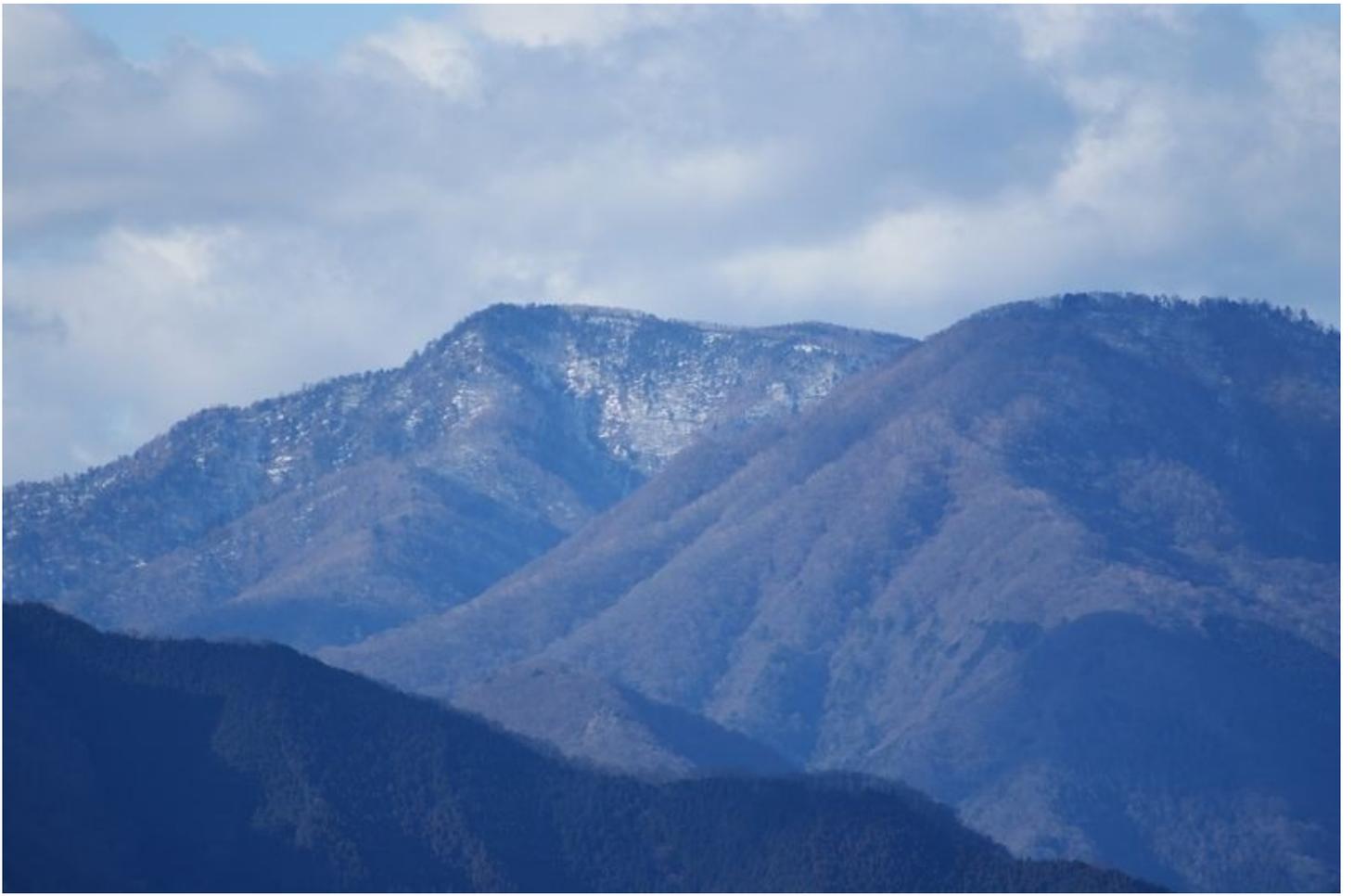
今日は聖ワレンタインの命日です。

140文字日記学園編その3.

しっと団団員
作 ARM









第8巻へつづく

メイドさんご主人様の140文字日記 第7巻

<http://p.booklog.jp/book/30716>

著者 : arm1475

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/arm1475/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30716>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30716>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

画像素材は一部以下の素材集より規定の下引用、加工しております。

・CG背景素材集5「和の風景」

・背景素材集 04 部屋

(株式会社ウエストサイド 製品)

画像素材は一部以下のサイトより規定の下引用、加工しております。

・写真素材 足成

<http://www.ashinari.com/>

本編キャラクター画像は以下のソフトで作成いたしております

・「コミポ！」(株式会社ウェブテクノロジー 製品)

<http://www.comipo.com/index.html>